座談会

『西南学院アーカイヴズ』発刊に向けて

出席者　**今井 尚生**（院長、大学国際文化学部教授、西南学院史資料センター長）
古田 雅憲（大学人間科学部教授、大学図書館長）
西　輝久（中学校・高等学校副校長）
平良 晃洋（小学校教諭）
森 万喜子（舞鶴幼稚園教諭）
土田 珠紀（早緑子供の園副園長）
司　会　**金丸 英子**（大学神学部教授、アーカイヴズ編集委員長）

司会（金丸）▶本日は、新しく発刊される『西南学院アーカイヴズ』の企画で、「『西南学院アーカイヴズ』発刊に向けて」というテーマで座談会を行い、学院史資料センター運営委員の皆さんの自由な忌憚のないご意見をお聞かせ願いたいと思っています。もともと2017年まで『西南学院史紀要』が発行されており、『西南学院百年史』編纂のための資料収集や調査研究という役割を担ってきました。しかし『百年史』が完成したことにより、その役割を終

えましたが、引き続きそのような刊行物が必要ではないかということで、この『西南学院アーカイヴズ』につながりました。ですから『アーカイヴズ』は、『紀要』の後継刊行物という性格とともに、内規にあるように「西南学院の歴史及び学院関係者の事績を調査し、公表するとともに、将来の年史に向けて積み重ねを行う」ことを目的としています。このような経緯をたどっていますが、皆さんから『アーカイヴズ』への期待や提言など自由に語っていただこうと思っています。まずはじめに、皆さんの職務の概要などの簡単な自己紹介をお願いします。

土田▶早緑子供の園で副園長をしております土田です。私は西南学院大学の児童教育学科を卒業して早緑に就職したのですが、その年がちょうど西南学院の創立70周年の年だったんですね。当時は学院の歴史についてもよく知らず、日々の保育で精一杯だったように覚えています。長く勤めさせていただき、今は、園の中では私が最年長なので、子どもたちに早緑の昔話をする機会があり、毎回改めて、歴史を振り返ることの意味について、とても大事なことだなとつくづく感じています。早緑の昔話は、園の創立記念日に1940年代の古い園舎の写真などを子どもたちに見せながら、戦時中に戦災孤児を引き取ったというところから始まります。そこで育った子どもたちや、食べ物や物資がない中で心を尽くして保育をされた保育者の方々の日々の話が、ただの昔話や遠い世界のできごとではなく、自分たちにつながる身近なものと感じられるようで、子どもたちはすごくよく聞いてくれます。そして私たちが早緑で勤めるようになった以降も、台風で屋根が飛んだり、大雨で樋井川の水があふれたりしました。そういう中でも、早緑は神様に守られ、西南学院とともに歴史を刻んできたということを、これからも伝えていきたいなと思っています。

森▶舞鶴幼稚園の専任教員として3年目の森です。その前にも非常勤講師で働かせていただいていましたし、今は年長児クラスの担任を受け持っています。それから、舞鶴幼稚園は2023年に創立110年を迎えますが、そういう意味で、舞鶴幼稚園の歴史や西南学院の歴史に興味を持っています。

平良▶小学校の平良です。今、4年目になりますが、その前は公立の小学校で

平良 晃洋 教諭

8年ほど勤務していました。私はクリスチャンですが、生徒たちに教えられることが多く、6年間で聖書の教えを学んでキリスト教というものに理解を深めていく、そういう姿を感じているところです。

西▶中学校・高等学校の副校長をしております西です。私は、公立高校受験に失敗して1980年に西南学院高等学校に入学したのが、西南学院との最初の出会いでした。キリスト教の学校だとは聞いていましたが、チャペルの時間があり、毎週聖書の言葉を聞く機会があるんだとカルチャーショックを受けたのを覚えています。その後、卒業して大学は本学ではなかったんですが、1988年に非常勤講師として働き始めて以来30数年経ちました。高校時代の話に戻りますが、私の場合、少し異色だったのが、私の父が僧侶だったことで、高校の毎日の終礼で聖書を読んで順番にお祈りするんですが、自分の中に違和感があって、それを頑なに「お祈りはできません」と断ったんですね。その時、担任の先生から、「それはしょうがないね」と許していただきました。そういうふうに当時から生徒の個性や主張などを大切にしながら育てていただいたと思います。

古田▶大学人間科学部の古田です。大学図書館長を6年ほど務めています。また学部の講義では日本文学と国語教育を担当しています。今年で17年目を迎えます。私は毎日学生と接するときに思っていることがあります。それは、たとえ一人ぼっちでいてもしっかりと生きていけるだけの技術と知恵と心の強さと身体をこの時期に作ってほしいということです。また併せて、同じような友人たちが周りにいるという信頼と、また彼らに対する畏敬とコミュニケーションする柔軟性をもってもらいたいと願っています。

今井▶学院史資料センター長の今井です。私が西南学院大学に赴任したのは、

今井 尚生 教授

ちょうど2000年で、文学部国際文化学科（当時）の専任教員としてキリスト教学を担当してきました。大学教育でいえば、高校までに比べて学生に直接かかわることが少ないので、学生にとって本当に血となり肉となるようなもの、密となる関係をどれだけもてるか。大学よりは中高、中高よりは小学校の教師の方がおもしろいというのは、小学校では1人の先生が全部の教科を

教えるから、生徒とかかわる時間が長いんですね。大学では専門の科目を教えるだけですが、専門以外のことを伝えていく、人格教育ということが大事だと思います。私の授業やゼミ、また指導している課外活動など、かかわる時間は短いのですが、それぞれの学生に私が持っている総合的なものを伝えたいと思っています。

自校史教育とキリスト教教育

司会▶自己紹介も兼ねて教育について触れていただきましたが、それでは次に、各学校の自校史教育、あるいは、キリスト教教育の現状はどうなのか、お聞かせ願えればと思います。

土田▶早緑の場合、0歳児から5歳児まで預かっておりますので、3・4・5歳児の幼児クラスの子どもたちには、クラスで週初めに礼拝を守り、聖書や神様のお話をします。もっと幼い0・1・2歳児のクラスでは、例えば0歳の赤ちゃんに神様のことをどのように伝えていくかと考えると、この赤ちゃんをどんなふうに抱き上げるか、どういうまなざしで見るのかという、日々の子どもたちとのかかわりすべての中で、子どもたちが神様に愛され、守られているという安心感を持ち、自分が大切な存在ということを実感していけるように願っています。そして私たち職員が、子どもたち一人ひとりを大切に存在そのものを尊重し、子どもが主体である保育を実践する上で、その早緑の保育理念の根幹にキリスト教があり、保育の場面一つひとつに結びついていることを、私たち自身も実感しながら保育を進めていきたいと思います。このことが、具体的に保育のカリキュラムとどのように結びついているのかを確認していこうと、ここ数年取り組んでいるところです。小さな子どもたちにどのように神様のことを伝えていくかについては、安心感や自分の大切さ、神様に愛されている温かな気持ち、見えないものを信じ、そこに思いを馳せる心を私たち保育者自身の内に育て確認し合いながら、日々の遊びや生活の全ての場面において、子どもたちに伝えていきたいと思っています。

森▶自校史教育と言えるものはないのですが、2023年に「舞鶴幼稚園創立110周年史」の記念誌を作る予定をしていて、今は、字が読めなくて分からない

森 万喜子 教諭

子どもたちもあとから読み返したときに舞鶴の歴史を知ることになるのだろうと思っています。またキリスト教保育ということについて言えば、舞鶴では、聖句を読んで賛美歌を歌い、お祈りをするという礼拝を毎日行っています。毎週月曜日には、神様のお話と献金をする時間があります。献金についてもなぜ献金をするのかということを子どもたちに伝えながら話をしています。その他に花の日礼拝や感謝祭礼拝、クリスマス礼拝など節目節目で礼拝の意味や感謝することの意味などを話ながら過ごしています。先ほど土田先生も言われたように、礼拝や聖話の部分だけじゃなくて、日々の保育がキリスト教と密接にかかわっているんだなと思っています。私もクリスチャンですが、私自身が教えられることがあります。その一つの例として子どもたち同士で話し合いをしてもらうということがあります。「今日はこれをします」という保育者からの一方的な押し付けではなく、「これをしたいんだけどみんなはどう思う？」「どうしたらいいかな？」と、一人ひとりが自分の気持ちや意見を話せる場を作っています。一人ひとりの意見が大切にされることによって、社会性や協調性が身についていくんじゃないかと感じています。

平良▶自校史教育としては、聖書科の時間のカリキュラムの中で、建学の精神や設立の経緯などを丁寧に説明されており、どの生徒も一度は、西南学院小学校ができた経緯の話を聞いていると思います。キリスト教教育の現状では、毎朝チャペルの時間に聖書科の担当の先生、教頭、校長が持ち回りで、毎朝15分程度、聖書のお話をしてくださっています。その時間がすごく大事で、毎日、平和や人権について考えたり、友だちや自分のことを学ぶなど、教科の中では得られないいろいろな気付きをそこで得ているなと感じています。生徒たちも知識は豊富に持っていて、きれいな感想などがたくさん出てきますが、どれだけ行動に結びつくかというところは、丁寧に見ないといけないと同僚と話しているところです。

西▶自校史教育については、創立記念日がある5月にチャペルの月間テーマとして西南学院の歴史や創立者C.K.ドージャーのことなどについて講師の先生に講話をしていただいてます。それから中高で作成した西南学院の歴史に関するパネルを毎年その時期に展示していますが、中学校の1年生に聖書の授業でパネルなどについて学習したことを1枚の紙に「ドージャー・レポート」と呼んで提出させています。生徒たちの個性が出ておもしろいのですが、そんな中で、自然とドージャー先生の足跡や生涯への理解が深まるのではないかと思います。高等学校の方

西　輝久 副校長

では、RKB 毎日放送と西南学院が1986年に協同で制作した『創立者C.K.ドージャーの生涯－愛と剣と』を見せて、西南学院の歴史について語り合っています。また今はコロナの影響で中断していますが、宗教部が中心となって、西南女学院にあるドージャー先生たちの墓参を5月に行い、創立者の歴史を学んでいます。

古田▶私は、1975年に西南学院中学校を卒業しました。現在の博物館の2階で月曜日から土曜日まで、毎日チャペルがありました。中学生の頃は、毎朝聞いた聖書の言葉や賛美歌は、なにやら欺瞞に満ちたもののようにしか聞こえませんでした。ただ、今振り返ると、その場で聞いたり口ずさんだりした言葉たちは、ずっと私の心の内に響いていたのだという気がします。たとえば「起てよ、いざ起て、主の強者」という賛美歌はよく歌った覚えがありますが、就職して教員になり、勤務先もいくつか変わったりするなかでシンドイ思いをしたときなど、その歌をつい口ずさんで自分を励ましているんですね。そういう自分の思いから自校史教育とは何かと考えてみますと、私にとっては、知らず知らずのうちに身に染まったもので、その価値はあとから何十年もたって、見えてくるものじゃないかと思います。今は、「自校史教育」という卒業要件の科目として試験がありますが、ほんとうは位置づけが違っているんじゃないかと思うんです。そういう学期末ごとの単位認定や授業評価ではない、もっと長い時間の奥行きのなかで、一人ひとりが真価を問い続けるものであるような気がしています。

今井▶自校史教育については、キリスト教学の一環で取り上げていましたが、最近は「西南学院史」として講義が行われています。キリスト教教育については、中高や小学校などに比べ、大学は学生に対して影響力が薄いと思いますが、キリスト教学が1、2年生の必修科目となっていて、3、4年生向けにはキリスト教人間学が選択科目として用意されています。大学では週3日チャペルがおこなわれていますが、大学の中で最大限可能なことを行っています。課外活動では、キリスト教活動支援課に深いかかわりのあるチャペルクワイアやハンドベルクワイアなどのほか、聖書輪読会やボランティアグループなど幅広く活動しています。

西▶キリスト教教育の現状について申し上げますと、1996年に中高一貫教育が始まりましたが、2021年から高校のゼロ時限が廃止され、ようやく始まりの時間が中高いっしょになりました。朝の礼拝が同時に始まるようになり、聖書を読んで、お祈りをしています。チャペルの時間は、中高とも週1回あり、また聖書の授業があるので、週2回はキリスト教に接する時間を守り続けています。生徒には、ここで学んだキリストの香り、西南の香りを持って卒業させたいと思っているんですけれど、3年間の中で、これぞという強烈な西南の香りというか体験をさせられるかが鍵になると思います。これを今後も続けていくためにいろいろな準備や用意をしなければいけないと思っています。

『紀要』の振り返り

司会▶今、自校史教育についてお話がありましたけれども、各校でいろいろ工夫されているなと感じています。さて『西南学院アーカイヴズ』は、『西南学院史紀要』や『西南学院史資料センター紀要』の後継冊子ということですが、『紀要』では、いろいろなテーマや座談会などの企画がありました。それをふまえて『紀要』の振り返りがあればお願いします。

西▶『紀要』の振り返りというと、創刊号に「等身大で見る」という寺園喜基院長（当時）の巻頭言がありましたが、先入観で見ないことが大事だということに触れています。『百年史』も『紀要』もそうですが、「きちんと資料を基にして執筆することが大事で、私たちが思い込んでいるようなC.K.ドージャー先生像を廃して見ることが大切

だ」ということを書いておられて、本当にそうだなと感じました。その他に「西南学院と戦争」というテーマや「アサ会事件」の記事など興味深く読ませていただきました。ただ、この『紀要』の浸透度はどうかと考えますと、なかなか学内の方々の眼に触れることが少ないのではないかと思います。『紀要』も貴重な資料としてネットで見ることができるので、多くの人にそのことを知ってもらいたいとページを繰りながら思いました。

土田▶『紀要』に伊原幹治先生が書かれた、「戦争責任、戦後責任」の中で、分

土田 珠紀 副園長

かりやすく、「そこに誠実に向き合う」という言葉を使われていました。非常に大事な言葉だと思います。責任という言葉は非常に重く、そして勇気が必要ですが、歴史を振り返り、検証すること、過去と将来に対して責任を持って臨むという西南学院としての強い意志や姿勢をもって、この『アーカイヴズ』が続いていくことに、意義と価値を感じます。

今井▶『紀要』の振り返りで言いますと、聞き取り調査が非常に大事な取り組みだと思いました。実際に経験したこの人ではないと証言できないというお話を聞き、積極的に記録することは重要なことだと思いますし、証言を聞く機会がだんだんと少なくなっているのが現状です。『アーカイヴズ』にとって重要なことは、もちろん学院が出版するものですからきちんとしたものを出す必要がありますが、論文のように学問的に検証するのは負担が大きいし、学問的に整っていなくてもとにかく記録をとることが大切じゃないかと思います。そして「150年史」や「200年史」のような年史を作成する時には、やはり学問的な正確さや評価をする必要があるのではないかと思います。そのことは将来の担当者にゆだねるという考えもあるでしょうが、今、私たちが出来ることは何かを考えることが課題でしょう。

『アーカイヴズ』に対する提言や要望

司会▶今、『アーカイヴズ』の話が出ましたので、その新たな役割と内容、『アーカイヴズ』に対する提言や要望、期待などがありましたらお願いします。

平良▶『アーカイヴズ』は、どういう人たちに読んでもらいたいと考えているのですか。

司会▶『西南学院アーカイヴズ』なので、まず西南学院の関係者、生徒、学生、理事、教職員などを対象にしていますが、卒業生、同窓生などにも読んでもらいたいと思っています。さらには、同じキリスト教の学校や教会などに配布したいと思っています。

平良▶なぜそのようなことをお尋ねしたかというと、生徒の父母に対しても教育というか、影響を与えていいのではないかと思ったからです。ここ数年、コロナ禍でチャペルの時間をネットでライブ配信を始めました。すると休んだ生徒だけではなく、「こんな話を毎日聞いているのか」と保護者の間で反響が広まり、ぜひ保護者にも聞かせてほしいという声が上がりました。そういうこともあって、『アーカイヴズ』も内部だけじゃなく、そういった人たちにも届けられるといいと思います。

西▶学校はいつの時代も社会の要請に応えるように強いられますが、これまで神様のみ旨に従ってつないできた先達たちの歴史を見失わないで受け継いでいくことが、私たちの拠り所になるのではないでしょうか。『アーカイヴズ』に期待することについては、そこと重なる気がします。そして、その後の検証や反省は、将来に役立てていくとか、そういう役割を自校史教育は担っていくんだろうと思いますし、『アーカイヴズ』は、後の世の鑑（かがみ）というのでしょうか、そういう役割を担ってくれるものだと信じて期待しています。

古田▶『アーカイヴズ』と聞くと過去の出来事を取り扱うイメージがありますが、私がぜひお願いしたいことは、現在進行形のことについてもきちんと記録して、建学の精神の立場から検証するような機能を持って欲しいということです。また必要に応じて積極的な意見を具申するなど、機関誌としての存在感を明確に打ち出してほしいと思っています。例えば、今、大学の体育館を新築していますが、先年、とある会議体での議論の中で「学院の姿勢を明確にするために、LGBTQ＋に配慮したもっと先進的なトイレを設けるべきだ」という意見があったんですね。実際には、その意見は積極的には取り入れられず、設計変更はなされなかったんですけれども、ここで大切なことは、この今日的で大切な課題に関して、今現在、学内でどのような議論がなされ、最終的にどのような理由で何がどうなっていったのかという、「いま、ここ」で生じている「事実」をきちんと記録することです。そして、その「事実」に対して学院史に携わる我々の「いま、ここ」での見解、問題提起を『アーカイヴズ』紙上に明らかにできるようであれば良いと思います。「過去」を精確に綴ることはもちろん大事ですが、それと同じくらい「現在」を記録し、検証しておくことこそが、「未

来」の豊かさに大きくかかわっていくんじゃないかと思います。そういう意味で『アーカイヴズ』は、何事に対しても忖度や自己規制や妥協を決して行わない、言わば「厳しい」雑誌、媒体であってほしいと思います。

今井▶今、お話がありましたが、現在起こっていることを、今現在、どう評価していくのかということです。今が、将来、歴史になったときに、今と将来では評価の基準が違うかもしれません。30年後、50年後の人たちが読んで、当時はこういう考えだったのか、ということを『アーカイヴズ』に蓄積していければと思います。

古田▶私は、中途半端はよくないと思っていて、こういう場でもあえて「厳しい媒体であってほしい」というような強い言葉を使ってしまいますが、それはきっちり言おうと思っているからなんです。『アーカイヴズ』にもそうあってほしいと思っていますが、もちろん具体的にはどうするのか、知恵を出さないといけないと思っています。

古田 雅憲 教授

森▶「厳しい媒体」という言葉を聞いて、そうあるべきだと思いました。それは、世間のマイノリティーに対する辛辣な対応があると思うんですが、そういった発言に対しての「厳しさ」で、本当は公正・公平さだと思うんです。ですから「厳しさ」の意味をしっかり理解した上で、そのような媒体であったらいいと思いました。

西▶今、起こっていることという話がありましたが、時代の流れもあり、高等学校では数年前に職員会議で女子にも制服のリボンをネクタイに変えるとか、スラックスを認めようということになりました。また、コロナ禍の中で、生徒全員にiPadを持たせているんですが、厳しい管理を緩和してはどうかという雰囲気もあります。大変な苦労のあった時代の先人たちの対応に比べれば些末なことかもしれませんが、これも底流に建学の精神があってのことだから、取り上げていくべきものではないかと思いました。

平良▶現在、生徒は経済的に余裕がある家庭の出身者が多いと思うんですが、中学受験というプレッシャーの中で生活している子がすごく多いのが現状です。これだけ聖書の言葉を聞き、とても良いチャペルの時間を過ごしたとしても、それでは賄いきれないほど疲弊している姿を目の当たりにしていますが、数字では測れないものがたくさん

あるということに気付いてほしいと願っています。また、西南学院として一貫性をもたせることは非常に大事だと思います。制服問題も中高では進んでいますが、小学校では慎重になっていて、すぐに進んでいないのが現状です。西南学院の教育は、一貫性があって太い性格のものであってほしいし、それは生徒も感じるんじゃないでしょうか。小中高大、どこに行っても西南は大事にしていることが変わらない、そういう教育であってほしいと思います。

厳しい媒体に

司会▶それぞれの先生方から、提言や意見などをいただいて、参考になりました。ありがとうございました。皆さんのご意見を聞きながら一番強く感じたのは、アーカイヴズ編集委員会が、現在の構成員では不十分じゃないかという点です。例えば、体育館のトイレの問題にしても編集委員会ではまったく知らなかったんですね。現場に近い人たちが編集委員会に入っていただいて、意見や提言をしていただくような編集委員会になるよう努力しなければならないと思います。今日の座談会で皆さんからのご要望をまとめると、これは大切な取り組みだけど、1つの学校では難しい。しかし学院全部の知恵と力

司会　金丸 英子 教授

を合わせれば何かできるのではないか、そういう冊子になれないかということだと思います。また、キリスト教教育を各校でそれぞれがんばっていらっしゃるので、それを支えるというか励ますことができるような内容を載せることができないかと思います。そして、戦時下にあっても建学の精神を求め、学院や学校を守ろうとした先達たちの足跡を紹介することも大切なことだと思いますが、体育館の問題のように、現在行われていることや時間が経つと忘れ去られてしまうようなことをきちんと記録し、建学の精神の立場から、その時の判断、評価を残しておくことが重要だと思いました。これは編集委員会への要望だと思って、ありがたく受け止めさせてもらいたいと思います。また、『紀要』には様々な記事がありましたが、『アーカイヴズ』もネットで見られるようデジタル化を進めたいと思っております。皆さんのご意見を網羅すると総花的になってしまうのです

が、ご意見の中で「厳しい媒体になる」ということはいい言葉だと思っています。良いことばかりではなく、光と影、等身大で西南学院の歴史を捉えることは、学院史資料センターだけだと自負しているので、そのような視点を持った『西南学院アーカイヴズ』にしていければと思っています。本日は、お忙しいところお集まりいただき、ありがとうございました。

※この座談会は、2022年10月3日に西南学院百年館2階セミナー室で開催しました。